

資料渉猟余話

その73

本下釣月(明治13年

33年)は正岡子規を慕い、下伊那から多くの俳句を雑誌『ほととぎす』や日本新聞に投稿し、子規らに選ばれ掲載されていた天折の俳人である。

この釣月の手書きの句稿集が南信州地域資料センターに六冊保管されている。どの集も表紙に『月光風声 釣月』と書かれ、和紙を二つ折りにし、こより紐で綴った手作りの句集である。新聞雑誌や参加した松本の松聲会・越中高岡の越友会などへ投稿した作品を書き留め、手元に残すために作った句稿集であ

ろう。この句稿集は、釣月の俳句仲間だった北原芋作(痴山 阿智之助)が『伊那の俳人』(昭和二年刊)で釣月を紹介した文に、「君の句稿は中々澤山残つてゐる」と書いた句稿であると思われる。釣月句集編纂のために託されたが、句集編纂が叶わず残されたものであろう。

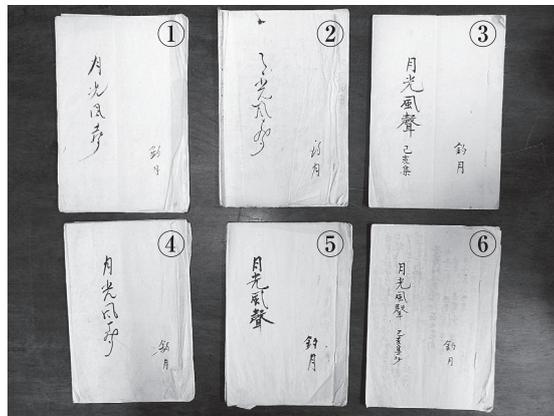
抄と副題があり、同年の抜粋抄)となる。釣月が句作を行ったのは30年7月頃から三年間。その二年間分がここにあることになる。釣月作品はこれまで新聞雑誌、飯田の松聲会で、子規に採用された句稿は中々澤山残つてゐる」と書いた句稿であると思われ。釣月句集編纂のために託されたが、句集編纂が叶わず残されたものであろう。

本下釣月俳句稿『月光風声』

竹村雄次

は重複句もあるが千八百句以上が並んでおり、釣月作品の全貌に迫ることができそう

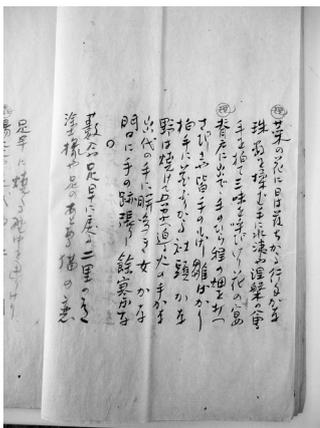
この六冊を中の作品の制作順で仮に番号をつけると①明治31年1月②同年11月③32年1〜3月④同年3〜8月⑤同年9〜12月⑥同年1〜12月(⑥は己亥集)の外にも、珠数を揉む手に水漬や涅槃の会/手を拍て三味を呼びけり花の宴/さびしさや皆手のもげし雛ばかり/拍手に花ふりかゝる社頭かな/野は焼



本下釣月『月光風声』南信州地域資料センター蔵 ○数字は文中参照

けて吾家へ迫る火の手かな/出代の手にあかぎれ多き女かな/門口に手の跡張りし余寒かな

を投稿したようだ。「手」という題から様々な発想で作られ、採用されなかった句にも秀逸句は多い。俳句仲間が天才と讃えた一端が伺える。また、同句稿には俳



ほととぎす 2巻6号へ送った題「手」の作品

崎奇峰と上原三川、高岡越友会の人たちに自分の俳句への評を仰いでいる手紙があった。実際に奇峰らは釣月句の作品評を送り返してくれており、その句稿が綴られている。岐草の茶村という俳人とは作品を批評し合う仲であったようで、お互いの手紙が綴られている。二人が手紙を通して切磋琢磨しあっているのがわかる。また、代田木下西氏へ送る」と書いた手紙の下書きがあった。そこ

こには句会を作りたいので参加してほしいという意味の言葉が見られた。代田木下が、釣月が竜丘で作った暮雲の会員となった可能性が高い。句会作りにかける思いが切実と書かれた手紙で、釣月の俳句に懸ける思いの強さが伝わってくる。このように同句稿集『月光風声』は釣月俳句を知るだけでなく、釣月がその時その時に何を思い、どんな行動をとっていたか知ることができる貴重なものである。今後、釣月研究を進めていく上で重要な史料となるであろう。明治時代に俳句に打ち込み中央に挑戦していた二十歳の青年。その青春の記録としても興味深い。